おとさと豆ダヌキ

ずっとむかし、鵜沼の大伊木から各務野にかけては、いちめんマツやカシの木がおいしげっていてキツネやタヌキがいっぱい住んでおった。

夜など、キツネが人の住む家のそばまでやってきて、「コンコン、コンコン。」となくこともよくあったそうな。そんなときは、きまっ

てどこかで、あかんぼうが生まれたり、近くでよめりがあったり、ちゃんとええことがあったのやと。

ところが、「ウェッ、ウェッ。」となくときには、火事がおきたり、村に病気がはやったり、悪いことばかりがつづいたということや。

タヌキもときどき出てきては、子どもをばかしたり、家の中へもぐりこんでは、みんなを困らせておった。

各務原の辻のあたりには、かわいい豆ダヌキが住んでおって、辻を通る年よりばっかをねらっては、ばかしておった。

この豆ダヌキにばかされて、辻のへんをふらふら歩きまわって、夜を明かした人も大勢あったということや。

そんなころ、大伊木の里に「おとさ」というばあさまが住んでおった。おとさの家はうどん屋をやっておったので、できたてのうどんやうどんこを持っては、売り歩いておった。

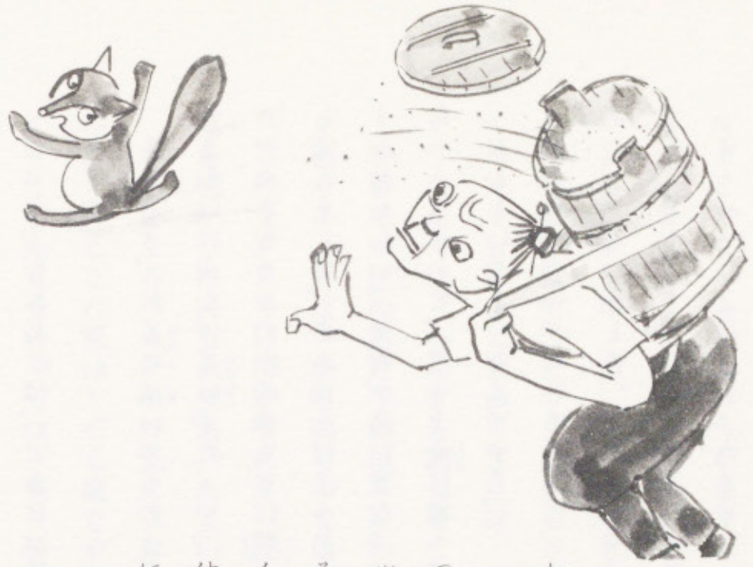
じょうぶなおとさは、ときには遠く蘇原の方までも売りに出かけたそうや。

あるとき、おとさはいつものようにうどんこをいっぱいしょって、あきないに出かけていった。やっとのことで辻まできたので、道ばたの大きなカシの木の根もとに腰をおろして、ひと休みしておった。しばらくして、さあ出かけようと立ちあがったのだが、どうもようすがおかしい。荷物が急に重なっとるのや。あっちへふらふらこっちへふらふらと、思うように前へ進むことができん。

「おかしいなあ。なんでやろ。」

とぶつぶついっているうちに、ふと前から聞いておった豆ダヌキのことを思い出した。辻の豆ダヌキは、まだ一人前になっとらんので、人をじょうずにようだまさんのや……ということを。

「そうや、ここは辻やったんや。」



「豆ダヌキがせなかにはいりゃがったな。さっさと出てうせろ。」
おとさは大声でそうどなって、からだを力いっぱいゆすった。
そのひょうしに、せなかにしょっておった大事なうどんこが、パッとこぼれてしまった。けども、それから急に体が軽くなって、あんなにふらついておったおとさの体がシャンとのびて、もとどおりになった。
「ああ、やれやれ。」
と思って歩き出そうとしてふと

先を見ると、うどんこをいっぱい体につけてまっ白になった豆ダヌキが、ぴょこりん、ぴょこりんと林の中へにげていくのが見えたそうな。
「やっぱり豆ダヌキめ、こんなばばあにまでいたずらしょって。」
おとさは、おこるどころかそのかっこうが、おかしておかしてたまらなんだ。
その日は、うどんこは全部うれ、たくさんのお金をふところにして、家に帰っていったということや。

阿部　義弘

おはちろさま

むかし、むかしある年のこと。雨が、ふるわふるわ、三日三ばんふり続いてもまだやまなんだ。

とうとう木曽川は大こう水になってしまった。水は川べりの小伊木の村の松林までせめてきた。松林があったおかげで、村までは水がこなんだが、松林にぴかぴか光るおかしなものが流れついた。村

のしゅうは、

「こりゃなんじゃろなあ。」

「魚のようじゃな。」

「どこから流れてきたものかのう。」

「竜のようなかっこうしとる。」

「金の竜じゃ。」

「しょうやさまに聞いてみたらええ。」

「そうじゃ。そうじゃ。」

みんなで、しょうやさまへおしかけた。しょうやさまも、

「おお、これはりっぱなものじゃな。金の竜のように見える。そまつにあつかってはならんのう。そうじゃ、どうしたらええか金こうさまにおうかがいしてもらおう。」

と、いうことになった。神主さまは身を清めて、上手（右手）のは

しで伏見いなりの方をさし、下手（左手）のはしでかわらいなりの方をさして、うらなったそうな。

「村のしゅうよ。これは天からさずかった雨神さまじゃ。ほこらを作ってまつるがよい。そうすれば、この村に雷の落ちないように守ってくだされる。」

そこで村のしゅうは、村から少しはなれた伊木山のすその古墳の上に、小さなお社を作ってその中におまつりした。そして、「八竜大王」と、名づけた。時がたつと、やがてそのよび名も「八竜さま」「お八竜さま」「おはちろさま」と変わっていき、みんなに親しまれるようになった。

ところが、何年かたったある年、また、木曽川に大水がでた。水がひくと、金の竜のすがたがふっと見えなくなった。

「こりゃたいへんだ。おはちろさまはどこへかくれてまわしたやろ。」

「ぐずぐずしとったらあかん。はよう、さがそ、さがそ。」

みんなで手分けしてあちこちさがしたが、とうとうみつからなんだ。村のしゅうはまた、金こうさまにおうかがいをたてた。すると、

「わたしは、羽島の方に身をかくした。たずねてきてもけっしてわからん。心は伊木にのこしてきた。村はきっと守ってやろう。ゆめゆめうたがうべからず。」

と、おつげがあったそうな。村の人たちは、それからは本体の金の竜のかわりに、石塔の五輪の頭をご神体としておまつりすることにした。

冬がすぎ、春が来て、夏となった。空がにわかにくもって、ゆうだっつぁまがござっても、それからはついぞ伊木の村には落ちなんだ。

その年の秋。風の強い日じゃった。どこの家でも取り入れのあと

かたつけで火をたいた。後しまつのわるかった家から火が出て、その火が、麦から屋根にとんで、もえるわ、もえるわ、大火事となった。火の元の家の人は海のむこうの国へにげていかしたそうな。その後、どうなったかはだあれも知らんそうや。

そんな大そうどうがあったので、あくる年の春の「おはちろさま」のお祭りは「やめ。」と、相談がまとまった。ところがじゃ、その夏どえらいゆうだっつぁまがござっての。屋根に落ちさして、天じょうをつきぬけ、床まで落ちてまわしたと。

村のしゅうは、祭りをとりやめたことをくやんだそうな。

「やっぱり、おはちろうさまは、天の神さまじゃったのん。」

「雨の神さまやった。」

「いーや。雷さまやて。」

「おはちろさまも、お祭りを待ってござったんやなあ。」

「祭りは、なんでもかんでもやらんならんのう。」

そのむかし、お祭りの月は、一けん一けんが、思い思いのごちそうをお重につめて持って出かける。おはちろさまの社の前に、むしろをしいてみんなですわる。そして、石頭におみきや、ごちそうをお供えして、神主さまがごちそうをあげなさる。厄年の人がおもちをまいて、みんなに厄をひろってもらう。おじいも、おばあも、おとなも、こ

ども楽しんだ。むしろをかかえて伊木の山のふもとへ行く村のしゅうの後すがたが目にうかんでくるなん。

今の場所へござったのはな、こう地せいりをしたためじゃ。古墳の上にまつってあったほこらを部落の近くへ移そうということになって公民館の横へもってきてもらったのじゃ。公民館の横のお宮様の小さなお社にかぎがかかっとるじゃろ。あの中におはちろさまがいなさるのじゃ。三月二十四日のお祭りは、おはちろさまのよろこんでくださるお祭りなんじゃよ。

先だってのゆうだっつぁまは、伊木に落ちさしたように思えたろうが、ようみてみたら古市場の人の畑やったと。やっぱり、おはちろさまは、ゆうだっつぁまの神さまや。お祭りはわすれたらあかんのやなん。

国定　仁子

弁天さまの池

ちょっとむかしの話や。

各務の山すそにきれいな池があって、そのまん中に、ちいさな弁天さまがござった。

早おきのじいさまやばあさまが、まい日まい日、おまいりしとりんさったが、なにせ、池のまん中のことやで、お社のそうじまではしてあげられんかった。

だから、お社はいつも木の葉をかぶっとった。
そやけど、池はいつでもまっ青な水をたたえて、ハスの花の咲くころには、それはそれはみごとなもので、見る人の心を楽しませておくれた。

ある朝のことや。
ググググ……。
ガワッ、ガワッ、ガワッ……。
池の中から、みような音が聞こえるんや。はらわたのさけるような、おそろしい音や。
じいさまも、ばあさまも、きみが悪うなって、
「なんぞ、どえらいことがおこるんやないやろか。」
「悪いよかんがするわな。」

って、心配げな顔をしんさった。
そのとたんや。
グラグラグラ……。
ガタガタガタ……。
土がはじいて、かわらがとびあがった。
「地しんや。」
「地しんやぞう。」
じいさまがさけびんさった。
ばあさままもさけびんさった。
おっとうもにげた。おっかあもにげた。若い衆も、子どもらも、みんなにげた。
たてに、横に、ゆれる道を、何べんもころんじゃあ起き、たおれ

ちゃあ立ち……。
「竹やぶや。竹やぶににげるんやあ。」
じいさまがさけぶと、だれもかれも、竹やぶにむかって、いっしんににげたんや。
やっとのことで、地しんはおさまったが、家はこわれとるし、道はわれてまっとるし、橋も、池も、みんなつぶれてまっとたんや。
それでも、おそがいおそがい

むねがおさまって、みんながほっとした。ところが、安心したら、のどがからからにかわききっとるのに気がついたんや。それで、あっちからも、こっちからも、
「水がのみたい。」
「水はないかや。」
って、水をさがしはじめたんやが、井戸は石まるけでうまってまっとるし、川にはどろがつまっとるしで、どこをさがそうとも、一てきの水もないんや。
ないとなると、よけいにのみたいもんや。のどはからからにかわいてまって、だれもかれも、もう動けんかった。
そのときや、
「おうい、おうい。」
って、遠くの方でさけぶ声がして、

「水やぞう。水があったぞう。」
って聞こえてくる。
じいさまの声や。たしかにじいさまの声や。
みんなおどりあがって、声のする方へ走った。
行ってみると、弁天さまの池やないか。水場という水場は、どこもかしこもうまってまっとるのに、弁天さまの池だけはふしぎと、まっ青にすんだ水でいっぱいなんや。
みんな、池のふちに顔をうずめて、水をごくごくのんだんやが、ほっと、ひといきついたときや。
「弁天さまや、弁天さまが立っていなさる。」
って、ばあさまが言いんさった。
みんなして見ると、たしかに弁天さまが、しゃんと、お社のところに立ってござった。

「弁天さまが、お水をまもっておくれんさった。」
「弁天さまが、わしんたあをまもっておくれんさった。」
って、みんなは口々に言いあって、何度も何度もおれいを言いながら、お水をいただいたんや。
それからのまい日、みんなは、家もなおし、道もなおし、橋もなおししたんやが、そのたんびに、弁天さまのお水をいただいた。そうして、早おきのじいさ

まやばあさまは、
「わしらあの弁天さまや。ありがたい弁天さまや。」
と言いあって、ますますねんいりにおまいりしんさったんや。

中村　勝行

白龍さま

各務原のあたりでヘビやマムシをつかまえて、くらしをたてている広田さんというひとがいました。

ある日、そのヘビ屋の広田さんが、いつものようにヘビをつかまえに出かけました。小川の近くの草原にこしをおろして一休みしていると、何やらゴソゴソと音がしました。見ると白いヘビがこちらへするするとすすんで来ます。思わず手を出すと、すうっとはい上がってくるのでした。

（ふしぎなヘビだなあ。ヘビはヘビ屋を見ると、たいていにげるのに……。）

と思いながら、よく見ると、その小さな白いヘビは赤い目でじっと広田さんを見つめていました。

（なんてかわいいヘビやろ。）

と思いながら、家へ持ち帰って、かざり戸だなに入れました。

ところが、ほかのヘビとちがって、この白ヘビは何をやっても食べようとしません。

（これでは死んでしまう。いったいどうしたこっちゃ。）

と、こまってしまいました。

すると、四・五日ほどたった夜、

広田さんのまくらべに、白いひげのいかめしいなりをした老人がおたちになりました。そして、

「わしは、おがせ池の八大龍王である。白龍はかならずむかえに行くから、もうしばらくめんどうを見てやってくれ。くれぐれもよそへ売ることは相ならんぞ。」

と言われたかと思うと、すっとすがたが消えてしまいました。

はっと目がさめた広田さんは、この白いヘビは八大龍王のお使いだったのか、だから自分からもの

をとって食べるような殺生はしないのだなあと思いました。
そこで広田さんは、たまごの黄みを注射器で流しこんで食べさせて、たいせつにおあずかりしていました。
それからしばらくして、各務の人が五・六人、広田さんの店先へヘビを見に来ました。広田さんは、この方たちこそ神のお使いだと思い、
「まあ、ようこそ。おまちしておりました。さっそく龍王さまのもとへ、つれて行ってやってください。」
と言いました。すると、村の人たちは、
「ちょっと待ってください。わたしたちは岐阜へ来たついでにヘビを見せてもらいによっただけです。村へ帰ってそうだんしてきますで。」
と言って、帰って行きました。

それから村の人は、区長さんにそうだんをもちかけました。区長さんもこまって、お薬師さまに話されると、お薬師さまはおがせ池の龍王さまにおうかがいをたててくださいました。すると、
「まつってやってくれ。北の方に小さいお社とがあるので、そのくろがいいだろう。だいじにな。」
ということでした。
そこで、おがせ池のほとりに仮堂を作って、『白龍さま』としておまつりをしました。
ところが、白龍さまは、はじめのうちは、だれがおまいりをしても知らん顔でした。そのうちに、行者さんがおつとめをいっしょうけんめいすると、白龍さまは舌をぺろぺろっと出して、うれしそうに木の上からおりて来て、その行者さんのそばでじっとしてみえました。

食べ物は、やっぱり自分でとって食べることはせず、行者さんが週にいちど、

「白龍さま、お食事やに出ておいでんさえ。」

と声をかけると、どこにいても、するすると出て来て、行者さんのひざの上で食事をするのでした。

ときには、おがせ池でからだをあらってあげることもありましたが、おとなしくじっとしておられるのです。白いからだで目だけが赤く、とてもかわいい白龍さまで

した。

「わたしはヘビはきらいやけど、ここの白龍さまだけはかわいい。」

という人が出てきました。

こうして、おがせ池の白龍さまは、ひょうばんとなり、あちこちから見に来ておまいりする人がふえてきました。

ある年の秋のことでした。伊勢湾に上陸した台風によって、このあたりは、それはそれはひどい暴風雨におそわれました。

明け方になって風雨がようやくおさまったころ、お薬師さまが白龍さまをしんぱいして見に行きました。すると、お社とはふっとんでしまっていましたが、そのしき石の間にじっとすくんでおられました。

「やっぱりここにみえた。どこにも行きなさらなんだわ。」

と、むねをなでおろしました。

その後、信者さんたちの寄付によって、『白龍殿』と名づけた、りっぱなお社とができました。

それから八年ほどたって、白龍さまは、ものを食べられなくなり、とうとうなくなりました。みんなはかなしんで、白龍さまをそのまま、はくせいにしておまつりしました。

それからも今なお、八大龍王さまのお使いとして、おがせ池を見守り、人びとのしあわせを守り続けておられるということです。

註　行者……ねっしんな信者

坂井多美子

山中不動明王

むかしむかし、九州の豊前の国に『秀』とよばれるそりゃあ元気のええ男の子がおった。

秀は毎日毎日、大ぜいの子どもんたをしたがえて、近くのお寺に遊びに来ては、セミをつかまえておしょうのぞうりにむすんだり、マツカサを本堂に投げ入れたりしとったので、おしょうもほとほと

あきれかえっとったそうや。

ところが、ある日から、その秀がお寺にぱったり来んようになった。来んとさびしなって、おしょうは秀の家へどうしたんやろとたずねに行かしたそうや。

ところが、秀はなんでやしらんが足がいたみだして、動かんようになっとった。秀のおとうはおしょうに

「医者どのによると、この子の足は一生治らんそうや。ふびんなことやが。」

と言った。おしょうはそれを聞いて、

「おとうの気持ちはようわかるが、世間には子どもに死なれた人や、病気で苦しんどる子どもを持っておる人が大ぜいおるんじゃ。」

とはげました。おとうはそのことばに気をもちなおして、

「そうじゃ、国中のお不動さんをおまいりして、秀のこといのって

きたろ。おっかあ、秀のことたのむ。」

そう言って豊前の国から、なんと美濃の国まで、お不動さんをおまいりして歩いたそうや。

一年や二年やない。十年のよう歩いたそうや。

おがせ池のあたりまでくると、おとうは、その池のほとりにある八大龍王さまにおまいりして、池から少しおくの方にある天王山に入って一休みしたそうや。やがて

「さあ、また歩くか。」

と、おとうが腰を上げようとするとちっとも上がらん。それなり日がくれて、気のどくに、おとうはそこでそのままねるよりしょうがなかった。すると、ゆめに、あのおしょうがあらわれて、

「目がさめたら、足もとにある石に不動明王をきざみんさい。」

と言うと、すっと消えた。

おとうが目をさましてみると、足もとに、ほんとうに石とのみがあるやないか。

「秀の足がようなるもんなら、どんなことでもしたろ。」

そう言っておとうがのみを持つときゅうに足に力が入って立ち上がることができた。

それからおとうは、かんかんでりの日も、ふぶきの日も毎日毎日不動明王を石にきざんだ。

いっしんな顔をして、そりゃあおとうの顔がまるで不動明王みた

いやったそうな。

コツコツ、コツコツと、一年や二年やない、ずいぶん長い年月をかけてきざんで、やっとでき上がった不動明王は、そりゃあみごとなもんやった。

右手にはけん、左手にはなわをもっとらっせて、どんな魔性のものもよせつけん顔してさけんどらっせる。その体のまわりにはほのおがめらめらもえあがっとる。

おとうがその不動明王をおがんでから、それを持ち上げにかかったら、おとうの腰がへなへなとくだけてその場にたおれてまった。おとうは上半身をおこして、いっしんに不動明王をおがんだ。そうすると足に力が入って、もとどおりすっくと立ち上がることができた。それでおとうはおそろしなって、そこへ不動明王をおいたままやっとるすにした家へもどることにした。帰りは早足やった。

家へたどりついたおとうは、あいかわらずふとんの上にすわった秀に不動明王の話をして聞かせた。それから秀といっしょに、美濃の国の方に向かっていっしんにおがんだ。するとふしぎなことに、秀がぬくぬくと立ち上がってそこら中を思うままに歩き始めたそうや。

勝野　淑代

すえの雨ごい

むかし、すえの村では、近くでとれた、ねん土で、つぼやさらをさかんにやいたそうじゃ。ところが、やきものをするには、たき木がたくさんいるので、山の木をどんどんきってもやしてしまった。それで、あちこちの山がはげ山になってしまった。そうなると雨が降っても、しもの方へ流れてってしまうので、田畑はいつも水不足。村の人たちは、それをほんとに苦にしておった。

この村の百姓、清兵衛の田も、山すそを切り開いてつくった田で三日田とよばれ、三日間雨が降り続かないことには、水をいれてはいけないという田ばっかだった。

清兵衛は夜中ねないで水ばんをしたり、川のそこにたまった、わずかな水を手おけけで田にはこんだりして、それはそれはよくはたらいた。

その清兵衛に、しもの村からよめさがきた。よめのおよしも清兵衛にまけずおとらずの、はたらきもので、明かるいうちは清兵衛といっしょに野良仕事、暗くなったら家の中の仕事と、こまねずみのようによくはたらいた。けれど、くらしはなかなかゆたかにならずいつもまずしかった。それというのも、水が不足すると、米がとれなくなるからだった。

この年は、春からまとまった雨が降らず、たりない水をわけ合って、やっと田植えだけはすませたが、あとはさっぱり。田んぼは、ひびわれができるしまつ、こんな時は村中の人が、村のちんじゅのお宮様にこもり、夜はたいまつの火をたき、七日七晩、雨ごいのお

いのりを続けた。

それでも、いっこうに雨の降ってくるけはいはなかった。だれもかれもが昼間の仕事に続く、夜の雨ごいで、つかれはて、ものをいう元気もなくなった。清兵衛の頭の中も水のことばかり、ねむられなくてみる夢は、葉先が白くかれはじめた稲のことばかりだった。

今夜も、どうしたら雨がもらえるのだろう、どうしたら、と清兵衛は背戸に立って夜空をあおいでいた。星がいっぱいで、とてもき

れいな夜空だった。
ふしぎ、その清兵衛の頭にポトリとしずくの水つぶ。
「ありゃ、雨かえ？」
と、ぐるりと見まわしてみると、なんとなんと雨じゃない、このしずくは、そこのもの干しにかけてある、清兵衛の野良着からしたたり落ちる水のしずくだった。もの干しにはきれいずきなおよしが、晩めしのあとであらった、せんたくものが、いっぱいならんで、夜風にゆらゆらとゆれていたのだった。
頭の水を手でぬぐいながら、「ああ、これが雨だったら……」とためいきまじりにつぶやいた清兵衛の胸に、「まてよ、こんなもったいないことがあるかえ、一しずくの水でもほしい時に、こんなことに水をつかっちゃいけない」と強く思えてきた。
「おーいおよし、およしでてこいよ。」

と叫んだ。なにごとかとふしぎそうに出てきた、およしに、
「こんな水がたりないという時に、わしの野良着など、あらってはもったいない、こんなに水をそまつにするから、神様が、おれたちの願いをきいてくださらないんだ。」
と、こわい顔をしてにらんだ。
びっくりしたおよしもしたたりおちる、水音をかぞえながら、
「ほんにそうじゃった。わしは水に困らない、しもの村そだちやで気がつかなんだ。これからは、もっと水をだいじにするで、ゆるしてくれんさい。」
と、あやまった。
つぎの日、お宮に集っている村のしゅうに、このことを話すと、みんなも
「そうじゃった、わしらも気がつかなんだ、せんたくなんてせんで

もええ、米の方がだいじじゃ、きたない着物でも死にゃせん、米ができなきゃ死なにゃならん、せんたくはやめよ。」

と、いってその日から、村中の人がせんたくをやめた。

そしたらどうだ、そのあくる日、雨が降ってきた。ほんとうに、まちにまっていた雨がのう。

清兵衛もおよしも、その雨にうたれながら、だんだん力をとりもどし、生き生きとしてくる稲といっしょに、あぜでおどりくるってよろこんだ。

それからというもの、すえの村では、雨ごいのうちは、ぜったいせんたくをしないということじゃ

後藤　秋夫

桃太郎

それはそれは、ずうっとむかしのことやった。

むこう岸の古屋敷という村に、そりゃあ仲のええじいさまとばあさまが住んでおった。

家の前には大きな川があって、いつも美しい水が流れておった。

ある日のこと。ばあさまがその川で洗だくをしていると、まるまる

と太った男の子が、かわいい手にしっかりとモモの実をにぎって、流れてきたのや。

子どものなかったじいさまとばあさまは、大そうよろこんでその子に桃太郎と名をつけ、だいじにだいじに育てたそうな。

やがて桃太郎は、気がやさしくて力持ちの元気な働き者になっていった。

あるとき、桃太郎はじいさまとたきぎを取りに山おくへはいっていくと、乳母懐という岩かげで、

女の人が赤んぼうをかかえて泣いておった。わけを聞くと、その女の人はさめざめと泣きながら、

「このずっと上の方に、可児川という川があります。その川のほとりに、みんなから『鬼の藤六』と呼ばれるそれはそれは恐しい盗ぞくの頭が住んでいるのです。藤六は、大勢の子分をひきつれては、村人たちを苦しめておるのです。」

と話した。そして、藤六の住むあたりのことを村人たちは、『鬼ヶ島』といって恐れているともつけくわえた。

これを聞いた桃太郎は、もうじっとして

おれなくて藤六退治に出かけることにした。じいさまは、桃太郎をひとりでやるのを心配して、犬山から犬をよんでおともにつけて送り出した。

桃太郎は犬をひきつれ、けわしい山道をどんどん進んで古渡しを渡り、こっちの岸へ着いたんや。雉ヶ棚からこれを見ておった雉もお供に加わり、猿洞からは猿も応援にやってきた。お供のふえた桃太郎は、元気いっぱい進んでいくと、とつぜん大きな岩かげから、藤六の子分たちがいっせいにおそってきた。そこで取組みあいがはじまったが、助の山から

「それっ。」
とばかり大勢の村のしゅうが助っ人にやってきたので、藤六の子分たちは、ちりぢりに逃げてしまった。
桃太郎たちは、近くの勝山に登って勝ちどきの声をあげ、さらに進んでいくと、やがて鬼ヶ島に近づいた。すると見ていた藤六の子分が、
「川を今渡って、せめてきたぞ――。」
と大声で仲間に知らせたので、藤六や大勢の子分たちが、「わあ―。」と出てきた。
そこで、敵、味方入りみだれてのものすごいいくさがはじまった。

でも、桃太郎の力もちにはかなわん。藤六たちはついに降参した。そして、今までにうばっていた大勢の女、子どもや、宝物をぜんぶかえしてあやまった。
桃太郎たちは、大よろこびでじいさまやばあさまの待つ村へ帰ってきたということや。
それを知った村人たちは、酒倉から酒を持ち出し、たいまつをたいて、坂祝のあたりで、大いによろこびあった。
そうして、うばいかえした宝物を、かわいそうな人たちに分けあたえ、残りをお社の下にうめた。そしてそこを、宝積ぢと呼ぶようになったそうや。

それからずーと村には平和がつづいたが、やがてじいさまもばあさまもなくなった。

すると、桃太郎の姿も見られんようになってしまった。

ところが、古屋敷にある山が、だんだん桃のような形になってきた。そこでだれがいうこともなしにこの山を桃山というようになったのやと。

阿部　義弘

ちよツバキ

ずっとむかしのこっちゃ。
ほら、鵜沼の北の山ん中に大安寺
という大きなお寺があるやろ。
村の女の子んたあは、いつもその
境内へいっちゃあ、まりつきしたも
んや。
へわたしの手まりは、絹糸かがり
つけばよごれる、たばえばかびる
川に流せば、お池にとまる
池にとまれば龍女がおこる……

と、大きな声で歌いながらさ。
でもな、ちよさだけは、ちょっともまりつきせずに本堂の前のツバキの木の下で、じっとみんなを見ちょんさった。
春になると、このツバキは、みごとに花を咲かせるんや。でも、みじかいいのちで、ポトンと花を落とすとちよさは、その花をだいじにだいじに拾って、ひとつずつ糸にさして首わにしあげると、まりつきしちょる子らにかけてやりんさった。
みんな、よろこんだ。
ちよさは、めったに口をきかんおとなしい子やったがな。

ある年のことや。
ちっとも雨が降らんもんで、畑の作物はもちろん、このツバキまでが元気をなくして、花をたんとつけなんだ。それで、ちよさは、

桶に水をくんできちゃあ根もとにかけてやりおんさった。
ところが困ったことに、村でいちばん頼りにしている池の水までが少のうなって、千歳もここに住むという龍女が、苦しゅうなったのか、とてもあばれ出した。
夜な夜な山姥に姿を変えては村里をおそい、人の命までうばうようになったんや。
みんなこわがって、夜には一歩も外に出なんだ。
「ちよさ。暗うなりかけたで、はよ家さ、かえろ。」
と、いつものように境内でまりつきしとった子らがさそっても、きょうのちよさは、どうしたのか返事もせず、少ししか落ちていないツバキをだいじにひざの上においてい、一まい一まい花びらをちぎっては糸にさしおる。
もう、日は、とっぷりとくれた。

その時や。

「ヒヒヒ……。なんと、きょうはよい日じゃ。こんなおいしいえものが見つかるとは。やわらかそうな肉じゃ。イヒ……。」

という声にふりむくと、これはこれは、山姥じゃないか。

白い髪をぼうぼうにして、顔中しわだらけ、大きな口から、前歯二本だけがのびている。

山姥は、ちよさをひきよせた。

でも、ちよさはこわがるどころか、にっこり笑って、

「ばあちゃん、このツバキ、きれい。あ、げ、る。」

と、山姥の手に、かけてやった。

山姥は、たまげた。ちよを食べたくてよだれがしたたるのに、どうしても、ちよを口にすることができなんだ。そして、

「ええい。ばあについてこい。」

と、ちよの手をひっぱってどこかへ姿を消した。

次の日の朝や。ちよが帰ってこなかったことを聞いて、村の人らが心配して、大安寺にかけつけた。

しかし、ツバキの花のさしかけの首わがひとつ残っているだけで、ちよの姿はなかった。

「かわいそうに。ちよは、やっぱり山姥に食べられたんや。」

と、みんなこわがった。そして、その首わを池へなげた。

すると、花びらがパッと散ってうずがまき、水がみるみる増えてくるではないか。

りゃりゃあ。これはなんと、なんと……。

みんなはふしぎがり、ありがたがった。

そんなことがあってから、翌年の春。

「やや、今年はなんてみごとにツバキの花がさいたんや。そして、このあざやかな色。今までに見たこともない真紅の色や。ちよに見せてやりたい。」

「いやあ。ちよが、ツバキの中に生きとるんや。この花は、きっとちよや。花をとるな。散った花もふむな。」

と、村のみんながいった。

ふしぎにあれからは、山姥も出なんだ。

今までは、このツバキの木は、幹という幹が空洞になってしまい、片側だけ皮肌がのこっているだけの老木なのに、春になると、今ともみごとに真紅の花を咲かせるんやに。

長谷川恭子

目の神さま

むかし、中山道すじのうぬまじゅくに『一りんづか』とよばれる古いおはかがあった。このおはかは、ぐるっとはたけにかこまれておって、近くに、働きもんのふうふが住んどった。ふうふには、まんだ子どもがなかったので、毎日神さまにおねがいしていたが、そのうちにねがいがかなったのか、かわいらしい女の子がさずかった。その日から、おとうと、おかあになったふうふは、まえよりうんと働いたそうな。

女の子が三つぐらいになったある日のこと、

「いたいよ。いたいよ。」

と、泣く。ふうふはどうしたことかと、

「ここか。ここか。」

と、あたまをさわったり、腹をおさえたがわからん。

「どこや、どこや。どこがいたいんや。」

と、ますますあわてるばかり——。

ふと、目を見ると、女の子の目がまっかや。これはいかんと、あちこちのおいしゃへつれてまわったが、ちっともらちがあかん。そして、とうとう目をすうっととじて

しまった。

そのようすを見ていた近くに住む、こうぼうさまのどうもりじいさまが、

「あのう、気をわるうせずに聞いてくだされや。」

と、えんりょしいしいこんなことをいった。

「いっぺん、はっけ見さんにみてもらやあたらどうやろなも。なにかのおたたりやなけないいが——。」

ふうふはそれを聞くと、

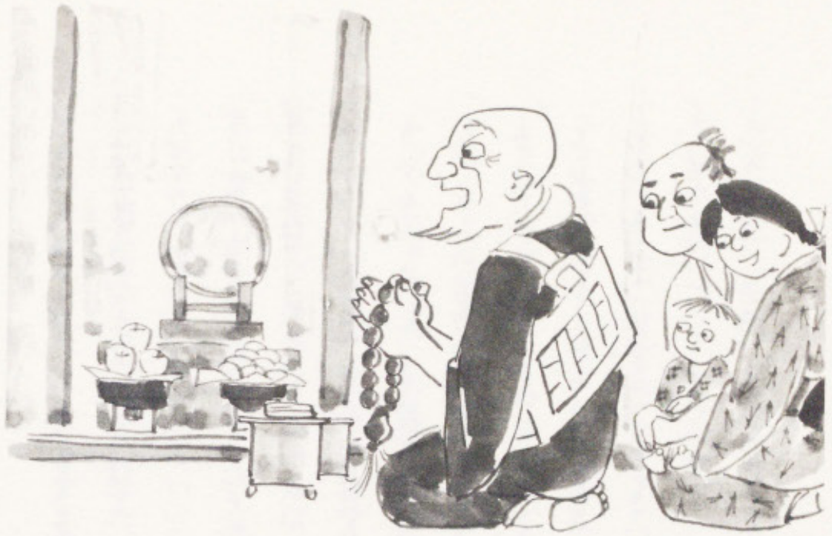
「わしらは人にうらまれるようなおぼえもないが、しらんまにおとがめをうけるようなことをしとるかもしれん。」

と、さっそくはっけ見のところへ出かけた。

はっけ見の家は、木曽川の橋をわたって尾張（おわり）にある。ふうふの話を聞いたはっけ見は、

「なるほど。では、おたずねしますが、家になんぞ祖先から伝わっているものはござらんかな。」
ふうふはたたみに手をついてよく考えた。
「そう言われましても、思いあたるものは――。なあ、おまえ？。」
「しまいこんであるものの中にでも、なにかないかの。」
「さあ――。心あたりと言われましても。」
「あっ。ちょちょっとお待ちください。そういえば、おし入れの中に、ほこりまみれになっておりますが、さらのような形のものがありまする。うらになにやらぼつぼつが四つついて。」
「色は青みがかっております。」
「それじゃ。それにちがいない。」
ふうふは思わずかおを見合わせた。
「それはかがみじゃ、それを今まで供養したことはあるかな。」

「いえ、いえ、家にあることさえなかなか気づかなかったほど、ほかりっぱなしで――。」
ふうふは、少しあわててこたえた。
はっけ見は、
「ひょっとしたら、それがおたたりやらもしれん。そのかがみはな、なみの者の持つ物ではなさそうじゃよ。ようく、しらべてもらわれるがよかろう。そして、ねんごろにご供養なさるがよい。」
と、言った。
ふうふは、早速、家へとんでか



えって、そのかがみのほこりをはらいとこの間におまつりした。そして、ぼうさまをおよびしてお経をあげてもらったら、ふしぎなことに、女の子の目がぱっちりと開いて、もとの澄みきった目にもどったげな。ふうふは、それから、毎日そのかがみをみがくと、だんだん人のかおがうつって見えるようになった。かがみのふちは、三角にとがってうらには、神さまのおかおのように見えるものが四つ、それに、けもののかっこうをした

ものも二つほってある。

ふうふは、こんどは昔のことをよく知ってござる先生におたずねに行った。そしたら先生は、目をまるうして、

「これが、お家に？、どうして。」

と、おどろかれた。そこでふうふは、

「はい、なんでも何代か前のご先祖さまが家を建てるときに土がほしかったので『一りんづか』のまわりの土をほらしたら、くわの先にこれがあたったのだそうで。どろまるけでご先祖さまも、かがみとは知らず『なんじゃこら、こらなんじゃ』と、たたいてみたりしたのだそうで。」

と、こたえた。先生は、

「これは、大むかし、天のうさまにお仕えした、身分の高い人の持っていたもので、中国で作られたものです。三角縁波文帯四神二

そはらのはなし

獣鏡といって日本にはまだ、二つしかみつかっていないものじゃ。大切に大切にあつかわれるがよかろう。」

ふうふは、口がきけないほどおどろいてかえるみちみち、

「むかしの人の大事なものには、たましいがこもっとるのかもしれんなあ。家の子の目を赤うしてお知らせがあっったのやろか。」

と、話し合ったそうな。

そうして、かがみの出てきたと伝えられるあとに、『萬霊塔』という碑を建て、毎年、八月一日には、海の幸、山の幸、おみきをお供えしてねんごろにご供養するようになったと。今でもそのかがみは、むらさきのふくさにつつんで桐の箱におさめられ、床の間にかざってある。そして『目の神さま』といって朝、晩、お経をあげておまいりしてござるそうな。

国定　仁子

エンドウ豆と戦

ずーっと、むかしのことや。

今のように、日本の国が大きく一つにまとまって治められておらず、力のある者を中心にして、あっちこっちで集団をつくって活動していたころのことやと。

この各務原台地の北の方に、田畑をたがやしたり、やきものを作ったりしてくらしている平和な集落があったんや。

この集落は、西の方から東の方から、人びとの行き来する道に近く、人の集まりやすい所でもあったから、作ったものを村の広場へもちよって、売るようになったのじゃ。田畑の産物や、木のわんや、

しゃもじや鉢や、布や、わら製品や、竹であんだかご。そして、やきものなどいろいろあったようじゃ。

人びとは、しあわせじゃった。

しかし、この村のようすを知る人がふえるにつれて、のんびりとはしておれなくなってきた。それは、豊かにひろがる台地、北につずく小高い山、川も流れているというよい土地の形をもっていて、そこからは豊かな産物が出るし、また、大昔から人びとが住んでいた所であることから、だれもが、いい所だと思うようになったからじゃ。

ある晩、おじじやおっ父たちが話し合った。

「川のむこうの村は、めっぽう強いそうじゃ。なんでも南の村を攻めてったげな。もう、いくつも攻め取ったそうじゃ。」

「それに、ひどく気のあらい人たちじゃげな。あっちこっちへ戦を

しかけては、自分の村を大きくしとるそうじゃ。」

「わしらの村は、いいところじゃで、気いつけんとあかんなあ。」

「そうじゃ攻め込まれてもええように守りかたを相だんしよう。」
「わしらあの村には兵士はおらんでのう。村の男で守らなあかん。」
「そこでじゃ。一つちえをしぼってな。」
「この考えはどうじゃろう。」
と、今まで、じっと考え込んでいたおじじが話しはじめた。
「それはな、作りものを使うということじゃ。」
「何をつかうのじゃえ。」
「まずな、これから先、雪どけが終わると奴さんたちは動き始めるじゃろで。それに備えようというこっちゃ。つるで延びる野さいを作ろう。エンド豆をな。夏には、十六豆やセンゴク豆がよかろう。いつ来るわからんで、だんだんに備えることにしよう。まずは、エンド豆をまこう。村はずれのあたりに、うんと広う播くがいい。」

「なるほど。エンドのつるを這わせるのか。」
「そりゃあ、名あんじゃ。おもしろいな。」
「それにもう一つな、エンドの手をとって柵にしよう。」
「それから、みなの衆、冬のうちに弓の用意もしとこうぜ。」
その晩は、明け方ちかくまで話し合いがつづいたと。
それからというもの、村びとたちは、ますます、仕ごとに精を出したんや。いつもより手間をかけたので、エンドウ豆のできぐあいはことによかってな。
村はずれのエンドウ豆は、そこらじゅう一ぱいに広がって、まるでよく茂った草原のようじゃ。つるを四方にのばし、たがいにからまり合いながら青あおと地面をはっとる。所どころにできているくぼみや段も、まったくわからないほどのエンドウ原になってのう。
村のとりつきに作ったエンドウ豆の柵もよくのびたものじゃ。さ

さ竹の茂みに這いのぼらせたエンドウ。ちょうどへいのようにも見える。そして後ろへ二重、三重と作り、しかも土をもり上げては段を高くしている。こうした作りがいくつもあって、相手側からは民家をとりまく生け垣にも見えるんや。村人の考えたとりでじゃ。

村の衆は、りっぱにできたエンドウのとりでを見上げて、

「これはよいできじゃ。」

「奴らのひっくり返るのがみえるようじゃ。」

「だけども、できることなら戦はしとうない。攻めてこんがええのう。」

みんな平和なくらしの続くことをねがっていた。

しかし、それから何日か後、予想した事がおきてしまったのじゃ。

それは、春の日の明け方のことやった。東の空がまだ暗いのに、

遠くに、馬のひずめの音がする。じっと耳をすますと、その音は近づいてくる。あらくれ男たちの声がこちらへ、かけてくるようじゃ。

静かな村が、にわかにきん張した。

「とうとう、奴らがやってきたぞー。」

村の長から連らくが飛ぶ。村びとたちは、すわ一大事と、す早く身じたくをし、守りの位ちへ走った。エンドウとりでの後ろには、弓をつかんだおっ父たち。物かげに棒ややりをにぎってひそんでいる兄さや、おっ父たち。村中には、おじじたちが道具をもってかまえている。うんと年よりや子どもたちは、山の方へひなんした。

おっ母は食べ物の用意をする。みんな一つ心になってもち場を守る。

「それ、近づいたぞ。奴らがー。」

おっ父たちは、目を大きくし、息をのんで前方をにらんでいる。

「エンド畑に入ったぞ。今にー、見とれ！。」

「それ、馬の前あしがつるにひっかかったぞ。馬が前へのめりよる。」

馬上の兵は、馬の手綱を強く引く。横に並ぶ馬も、後ろにつづく馬も、つるにあしをひっかけてつまづきそう。右や左によろめいている。バランスがとれない。進めない。騎士は、「どうした。進め！。」

と馬の腹を両足で打つが、馬の後あしもつるにひっかかってうまく前へ出せない。大きくいなないて仁王立ちになる馬。と同時に、馬上の人が馬から落ちていく。「しまった！　うぬー。はかりおったなー。」と無念そうな敵の声。大将らしい。

徒歩の兵たちが走り来る。前がつまっている。馬があばれ、騎士がたおれるのを見て「どうした。どうした。」とあわてて走りよろうとするが、これまた、エンドウに足をとられて、早く進めない。ひざまで深く足がうまり、つるがひっかかって足が前へ出ないのだ。

「なんというこっちゃ。」といいながら、足もとのつるを刀で切りはらって進む徒歩の者。一歩二歩進んだ所で落し穴。どすんと落ち込んで仕かけられた矢がささる。段につまづいて倒れたところに、またもやかくれていたおっ父たちに一打ちされる。いたるところに仕かけられた穴や段や石。兄さたちは、やっつけてはかくれた。

つるをかきわけ、ふみつけ前進した敵は、生け垣（エンドウ）を近くに見てほっとしたようす。民家のならぶ所だと思ったにちがいない。

「それ！今だ。うて。」

おっ父や、兄さらが、エンドウとりでの裏から、エンドウの柵ごしに矢をはなつ。目の前ぎりぎりまで敵を引きよせ、ブスブスと矢を射たのだった。不意をくらって、敵はバタバタとたおれていく。

そうして、戦う力を失ない、不利を知った敵は引き上げていったと。

村人の必死の守りで平和がまたやってきたことを、村人たちは、この上もなくよろこんだのじゃ。

だが、しばらくして敵は再び攻めてきた。力をもり返し、前よりも多い兵士をひきつれてやってきたのじゃ。

少数に多数。百姓にいくさのうまい武士。もはや、エンドウは使

えず。勝ち目はなかった。多くの若者たちは、エンドウ畑や、ささかげでころされた。おっ父も死んだ。兄さたちも死んだ。エンドウを作った男たちは、みんなころされてしまったんじゃ。

残った人びとで、かなしいとむらいをした。そして、みんなは言った。つぶやくように言ったとよ。

「なんというむごいことや。」

「いくさは、もう、いやじゃ。」

「村を守るために考えたエンド作りじゃったがー。敵をよけい怒らせてしまって、わしらのだいじな人を、たあんと死なせてしまったのう。」

「おっ父も、兄やも、くやしーいってさけんどるやろなあ。」

「もうエンドは作りとうないっ。」

「そうだ。エンド作りゃ、おっ父も、兄やもうれしゅうないやろて。」

「『エンドウ』畑見たら、そこに死んどるおっ父のすがたが浮かぶもんなあ。かなしゅうて、つろうて、エンド畑は見れんがー。」

「そうやて、わしはもう、どんなことがあっても、エンド豆だけは作るまいぞ。」

「そうや、作らん。作らんぞ。」

「そうする。わしも。」

こうして、この村の人たちは、エンドウ豆を作らなくなったとさ。子から孫へと代だい言い伝えて、ずっと今日まで守ってきたんやと。

山田賀津子

石神さま

むかしむかし、蘇原にじいさとばあさとひとりむすこの『直』がすんどったそうや。直は、もう長い間、病気でねとったもんで、じいさとばあさが米とか野さいを作ってその日ぐらしをしとったそうや。

ある日、ばあさが、

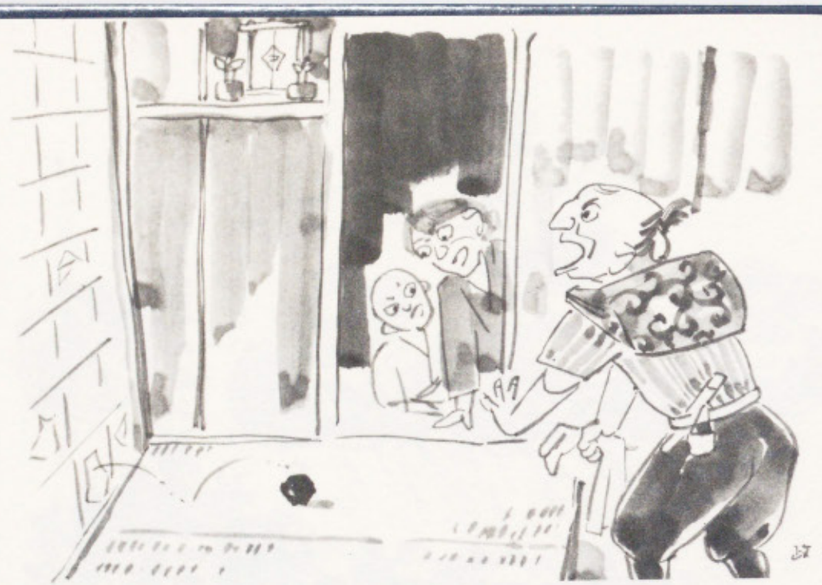
「これでは直に薬を買ってやることもできん。どうしたもんやろか。」

と、じいさにこぼした。するとじいさは

「ほれ、きょ年とれた豆があるやろ。わしが、これからその豆持って、岐阜へ行って薬ととりかえてくるで。」

と、豆ひっさげて、えっちらおっちら岐阜へ向かった。
やっと見つけた薬屋で、じいさが豆を見せてわけを話すと、その薬屋は、
「それだけの豆ではじいさまの言う薬とはとりかえられん。」
ときっぱり言った。じいさは豆を持って、重い気持ちでもと来た道を帰ることにした。
そのころのここらへんは今みたいに家なんかあらへん。マツ林をくぐりぬけ、ススキやハギのしげっとる野原の中の一本道を、じいさはとぼとぼ家へ向かった。やがて日もかげって、風も出てきたので、じいさは、とことこ、とことこ、小走りに走り始めた。
すると、足のうらに「こつん」と何かかたい物があたった。
「あっ、いた。」
じいさがかた足をあげてみると、わらじのわらの間に小さな石がは

さまっとる。
「なんや、この石…。」
じいさはその小さな石をつまみ上げて、ススキのしげみの中にほかった。そしてとことこ走っておると、また「こつん」と足のうらにあたった。かた足をあげて見ると、さっきといっしょの石がはさまっとる。
「こりゃっ、いったいどういうことや。」
じいさはつまみ上げて、こんどはハギのしげみの中にほかった。
そしてとことこ走るとまた「こつん」
こんどはわらじからつまみ上げて、ゆっくりながめまわした。同じ石やけど、少し大きくなっとる。じいさはきみが悪うなって、その石を思いっきり遠くの方へ投げてむちゅうで走った。



境川の橋まで来ると、日がとっぷりとくれた。じいさは、ちいとでもはよう家へつきたいばっかや。
田んぼをこえ、野原をこえてやっと自分の家の近くまで来た時、さっきの石が、こんどはじいさの足の前をころころと転がってじいさより先に家の中へ入った。
じいさがいそいでげんかんに近づいてのぞいて見ると、その石はしょうじのやぶれあなからへやの中に入って、神だなへ上がった。
そしてお灯明をくるっとまわって、

ほこらの中まで入った。

おどろいたじいさは、薬のこともわすれて、ばあさとむすこの直に、今見た石の話をした。

それからというものこの家では、むすこの病気は治るし、よめさんはくるし、まごにはめぐまれていいことばっかがつづいたんやと。

勝野　淑代

雷の落ちた井戸

むかーし、むかし、この蘇原の空の雲の上に、雷さまがひとりで住んでござったと。

まだ若い雷さまで、ちいとばかり気の短いとこがあっての、雨を降らそうと、雨雲を呼び集めるときなんぞ、ちょっと集り方がおそい雲には、

「何やっとったんや。呼んだらす

ぐこんか。ゴロゴローッ。ガラガラーッ。」

と大声で、よくどならっせよったんやと。

それに、たまに遊びによってくれた仲間の雷さまにも、なんぞ気にいらんことがあると、もう、顔をまっかにして、ゴロゴロッ、ピカピカッ、とやりだすこともようあったんやと。

それで、年よりの雷さまんたは、

「困ったやつやなあ。元気があるちゅうんはええが、まだまだ修行がたらんわい。そうたびたび怒ってばっかおっては、今に困ったことになるぞな。」

て、言い言いしとらしたんやと。

そんなふうやで、その下の村々の百姓衆んたは、大困りやわなあ。雷さまが怒らっせるたんびに、ピカッ、ゴロゴロゴロー、と落ちてござるもんやで、田んぼではたらいとる人が大けがをしたり、悪く

すると死んでまうこともある。また、雨が止んで、やれやれ雷さまもしずまらしたわい、と思うとるとこへ、ガラガラ、ドッシン、と屋根へ落ちてござって、家が丸やけになってまったり、山に落ちやして、せっかく育ちかけた木を黒こげにされてまったりで、この雷さまには、ほとほと泣かたれとったんや。

ある年の、やっぱり夏のことやった。この雷さまはな、また何かあったとみえて、どえらい怒りだしたんや。

その日は、よっぽど腹が立っとったとみえて、いつもよりひでえいきおいで、

「グウワーッ。ゴンロゴローッ。」

と、そばにおった雨雲を、思いきりけとばして落ちてござった。

ちょうどそこは、八幡さまのま上やった。境内に一きわ高い木が見えたで、その木に落ちるつもりやったんが、あんまり怒っとったんで、ちょうしがくるってまったんやろか、その木のくろにあった大きな井戸の中に、ゴロゴロッ、ドボーンと落ちてまったんや。

「ゴロッ、ウオーンッ。」

と、思わず井戸の中で大声を上げたんやが、井戸は深うてさすがの雷さまにも、すぐに出てくることはできなんだ。

お社の中で、このようすを見ておられた神さまが、

「しめた。この雷を井戸の中にとじこめてまえば、きっと村の衆も助かろう。」

とお言いなされてな。

「神をおそれず、お宮の井戸に落ちるとは、ふとどきなやつじゃ。」

と言わして、大きな石でふたをしてしまわれたのじゃ。

こうなったらいくら雷さまでも、もう、井戸から出ることもできんわなあ。そこで、まっくらな井戸の中からしょんぼりと、

「神さま。もう決してこのあたりに落ちて、村の衆を困らせたりはしません。井戸から出してくだされ。」

とたのんだんやと。

神さまは、このままずうーっと、とじこめておくのもええが、少しかわいそうやなとお思いなされての、

「もう、決してこのあたりに落ちたりせんと、ちゃんと約束するか。」
と言わっせたんや。すると雷さまは、
「はい。もう決して、落ちてはきません。」
と、涙を流して約束したんやと。ほして、(もう短気はやめよう。怒ってばっかおっては、ろくなことないでなあ。)と、心に決めたんや

と。
それで、神さまは大石をどけて、雷さまを空へ帰してやらしたんや。
それからは、この蘇原のあたりへは、むかしほど雷が落ちんようになったんやと。その井戸は、今でもあの賀佐見神社の境内にあるわな。

字野　孝子

あとがき

各務原市制二〇周年の記念すべき年に〝かかみがはらのむかし話〟続編を発刊できることは、何かの因縁だと言えます。

むかし、といっても、今のご老人のみなさまがお生まれになった頃は、とても今のような大都市になろうとは想像もできない片田舎であったということです。それが、市制二〇周年を迎えたのですから、ご老人の方々にとっては、感無量のものがありましょう。

わたしたち民話同好会では、五年前に〝かかみがはらのむかし話〟として一冊の本を作りました。その本は、わたしたちの予想以上に大ぜいの方たちに読んでいただき、大へん喜ばれました。その後、市の高齢者大学院のみなさまが、昔話の採集を始められたことを耳にして、その方々のご協力をいただきながら、さらに多くの昔話を採集し、わかりやすく、親しみやすい昔話として書きなおしました。

わたしたちの身のまわりには、移りゆく年月とともに忘れ去られていく

多くの貴重なものがあります。昔話もそのひとつと言えます。それを、より多くの方に、より確かに残していくために考えたのがこの本です。

そして、この本を作るまでに多くの方々にご協力いただきました。〝コボたち〟編集長の国枝栄三先生には表現技術について、小島政信先生には、装丁と挿絵について格別のご尽力をいただきました。ここに改めて、厚くお礼申しあげます。

また、公務ご多端の折にも関らず、温かいお言葉をいただきました各務原市長平野喜八郎殿、市教育長水野定之先生、市校長会長大島美信先生に心からお礼申しあげます。

願わくは、多くの方たちのご協力とご支援によってできあがった昔話の一冊子が、各務原市民の尊い遺産として〝ふるさとに通じる昔話〟として、人々の心の片隅に残していただけたらと思います。

昭和五十八年九月

かかみがはら民話同好会

御協力いただいた方々

大伊木町　伊藤　知也　　桐野町　坪内　庄次
小佐野町　岩井　嘉寿　　おがせ町　原　恵準
小伊木町　大栗　実　　神置町　松尾　松司
古市場町　笠野とま子　　おがせ町　宮崎　證立
新加納出身　金武マサエ　　鵜沼西町　武藤　秀一
日吉町　河村　弘道　　信長町　村上　藤枝
緑苑町　木村　管一　　桐野町　村瀬　銀吾
鵜沼西町　坂井　幸子　　早苗町　柳原　こう
野口町　坂井　吉美　　宝積寺町　横山　操
吉野町　清水　己好　　西市場町　領木　みと
須衛町　白木　光夫　　その他高齢者大学院の方々

（敬称略、五十音順）

かかみがはら民話同好会々員（各務原市の先生による教育研究サークル）

阿部　義弘（蘇原第二小学校）
勝野　淑代（那加第三小学校）
国定　仁子（中央小学校）
後藤　秋夫（那加第三小学校）
坂井多美子（尾崎小学校）
中島　忠和（中央小学校）
中村　勝行（各務小学校）
西村　敏行（市教委社会教育課）
長谷川恭子（那加第三小学校）
山田賀津子（尾崎小学校）
宇野　孝子（元稲羽西小学校）
小口　晃生（　〃　）

続かかみがはらのむかし話

発行日　昭和五十八年十一月三十日

編　集　かかみがはら民話同好会

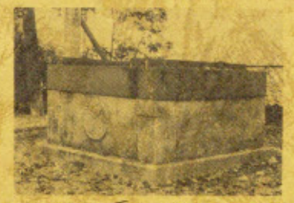
印　刷　浅野印刷株式会社

岐阜県羽島市江吉良五一七

☎〈〇五八〉九二―五六一一㈹

落丁・乱丁はお取替えします

かかみがはらの むかし話 絵図



名古屋市図書館
113758395